

FC77  
31



\*0049570001\*

0049570-001

FC77-31

小学国語読本朗読法

神保格・著

厚生閣書店

1933-1939

AHJ

FC77  
31

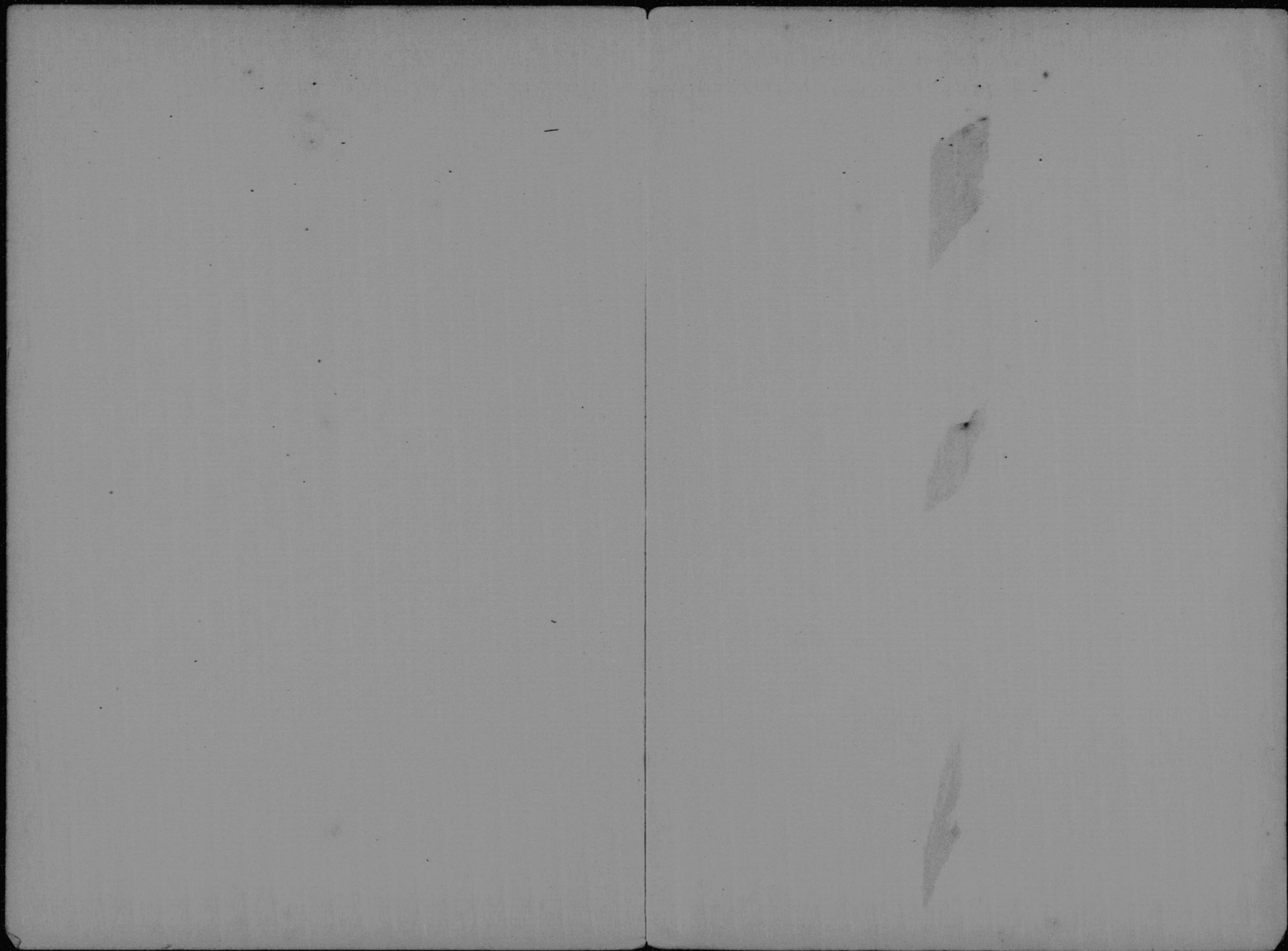
東京文理科大學教授  
神保格著

小學國語讀本朗讀法(卷一)

第一前期用

武知訓導





尋一前期用

小學國語讀本朗讀法(卷一)

神保格著

東京文理科大學教授

東京文理科大學教授  
神保格著

小學國語讀本朗讀法(卷一)

尋一前期用

FC77  
31



989199

### はしがき

著者前に「尋常小學國語讀本の發音とアクセント」を公にしたが、今回新に「小學國語讀本」が出来たので、その材料について生きた音聲の言語を研究して見ることにした。本書に於ては新讀本に用ひられた語句について現代東京語に行はれる母音・子音及びアクセントの慣習を表記する外、實際生活の或場合に使はれた實地の言語としてこの新讀本の内容を觀る。そのためには、各の文に含まれる特殊な意味と心持とが音聲の斷讀・速度・抑揚調子と如何に關聯するかを考へることが必要である。本書にはこの方面をも加へて假に朗讀法の名稱を附けたのである。

卷二以上も原讀本が公にされるに従つて順次に刊行する豫定である。  
朗讀法に關する斷續・速度・抑揚調子の部について馬淵冷佑氏の有益なる助言に負ふ所が多かつた。茲に記して感謝の意を表す。

昭和八年三月

神保格

小學國語讀本朗讀法(尋前期用) 目次

はしがき

序説

朗讀法とは何をいふか	………	一
最も良い朗讀	………	一
最も良い朗讀に必要な條件	………	二
文章の内容	………	四
朗讀と黙讀	………	六

目次

音聲各項の解説

發音……アクセント……斷續……速度……抑揚調子

シヨ オガク コクゴドクホン マキノイチ …… (一九一八七)

〔目次畢〕

小學國語讀本朗讀法(卷一)

〔尋一前期用〕

## 序 説

朗讀とは何をいふか

朗讀は文字に書いてある言葉(文章)を音聲に發することである。文字に書いたものを眼の前に置いて之を視ながら音聲に發することを通例「朗讀」又は「音讀」といつてゐる。原文の文句をそらで覺えておき、之を音聲に發することは通例「誦讀」といつてゐる。朗讀も誦讀も一定の文句を音聲に發するといふ點で全く同じことである。今この書では誦讀する場合をも含めて「朗讀」と名づけることにする。

最も良い朗讀

馴れない中や練習の積まない中はいきなり最も良い朗讀をすることがむづかしい。練習を重ねた末、これならば最も良い朗讀であるといふ所まで達するには、練習する際常に「最も良いもの」を目標として心の中に置いてゐることが必要であ



る。譬へていへば最も良い朗讀は旅行の目的地到着點である。競走ならば決勝線である。到着點決勝線が如何に遠くても之を常に眼中に置いてゐなければ歩くこと走ることが全く無意味になる。故に朗讀法に於いても最も良い朗讀とはどんな事かを先づ考へて置き、之を目標として一步でも之に近づき得る様絶えず練習しなければならない。

## 最も良い朗讀に必要な條件

最も良い朗讀であると云はれるためにはその音聲に左の條件が具はつてゐなければならない。

## 〔甲〕 一般的條件

一般的といふのはどんな種類の文章でも又どんな内容を含んだ文章にも當てはまる條件といふ意味である。それには次の二箇條がある。

- (イ) 正しい發音。即ち母音や子音を一々正しく發音すること。
- (ロ) 正しいアクセント。

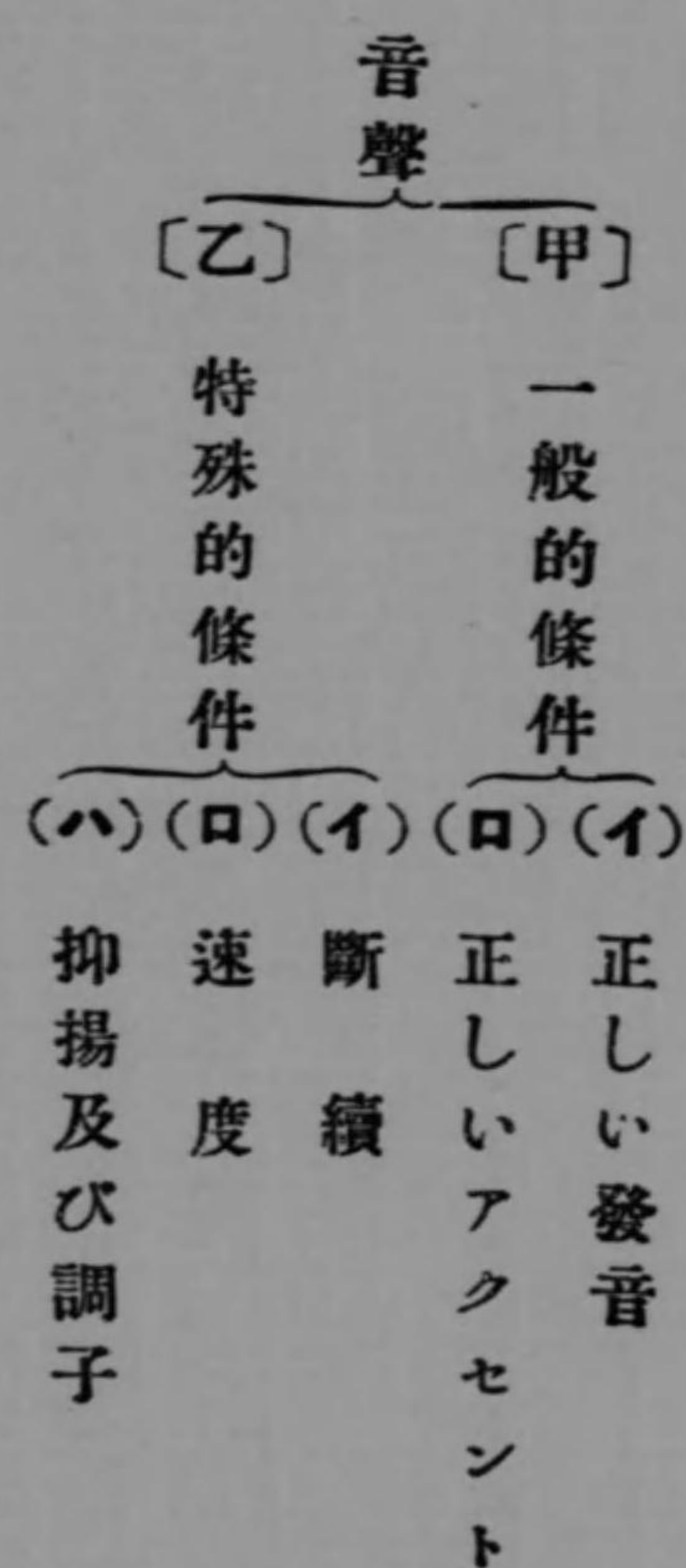
## 〔乙〕 特殊的條件

特殊的といふのは一つ一つの文章に應じて變るものをいふ。一つの文章にはその文章に限る一定の意味があり特殊な心持が含まれてゐる。同じ文句を使つた一つの文章でも前後の續き工合によつて特別な意味や心持が附いて來る。故にこの一々のちがひを音聲によつて表現しようとするには、右に擧げた一般的條件の外に更に加ふるに次の箇條が必要になつて來る。

- (イ) 斷續。即ち聲を切らずに一息に續けて朗讀するか、又は聲を途切らせるか。及び聲を途切らせて休止を置くにしても短い休止を置くか長い休止を置くかといふこと。
- (ロ) 速度。即ちゆつくり朗讀するか、早口に朗讀するか、又は次第々々に早くするか遅くするか等の區別。
- (ハ) 抑揚及び調子。強い大きな聲と弱い小さな聲との區別を假に抑揚と名づけ、音樂的に云つて高い調子の聲と低い調子の聲との區別を假に調子と名づける。通例強い聲は自然に調子が高くなり、弱い聲は調子が低くなるといふ様な工合に、抑揚と調子とは相伴ひ易いものである。

けれども、常に伴ふとは限らない。強くて而も調子の低い聲、即ち俗にいふ「太い聲」といふものや、弱くて而も調子の高い聲といふものもある。而して一つ一つの文章によつて右の色々な組合せを工夫することが必要であると同時に、一つの文章の途中でも次第々に聲を強くしたり弱くしたり、高く聲を上げて行つたり低く下げて行つたりする變化も考へなければならぬ。

總括すれば、



文章の内容

文章に含まれ表された意味とか思想とか心持とかいふものを今「内容」といふ廣

い名稱で呼ぶとすれば、その内容を捉へることを人は通例「解釋する」「理解する」「味ふ」「味讀する」「體得する」等色々な云ひ方で呼んでゐる。又その内容の中如何なる點を捉へるか、どういふ處に眼を着けるかについて近頃は「形象を讀む」等の云ひ方で呼ぶ人もある。是等の點については從來世に公にされてゐる讀方研究讀方指導等の書物や論文に詳しく説かれてゐるから、今この書では省くことにする。とにかく最も良い朗讀をなすには先づ第一に内容をよく理解し、よく味はなければならぬ。内容の理解鑑賞が、朗讀法の先決問題である。内容が伴はないで而も最も良い朗讀などといふことは有り得ない。今この書では内容の理解鑑賞が或程度まで既に出來てゐるものと豫想し假定して置く、而して更に之を音聲によつて如何に表現するかといふ方面を主として考へることにする。

但し茲に一つ非常に大切な事がある。それは内容と朗讀との關係の問題である。右に述べた様な云ひ方をすると、内容と音聲とは本來無關係な別々のもの様に思はれ易い。内容の理解鑑賞が十分に出來上つた後、更に改めて音聲を考へる仕事にかゝるかの様に思はれ易い。言換へれば音聲を全く考へないでも内容全部をつかむことが出来るものの如く考へられ易い。しかし思想感情の働きと

音聲とは元來別のものであるとしても、之が聯合し組合はさつて「言語」「語句」「文章」となつた以上は決して一方を全く離れて他方を考へることは出来ないものである。即ち最も良い朗讀を聞いた時又は自ら爲した時始めて眞の内容理解鑑賞が出来るのである。最も良い朗讀は眞の理解鑑賞を助けるのである、否之を完成するのである。最も良い朗讀が出来ない中は眞の理解鑑賞がまだ出来てゐないのだと云つてもよいのである。

## 朗讀と黙讀

眞の理解鑑賞は音聲に出さず黙讀でも出来る、否黙讀の方が一層良く出来ると考へる人がある。成程或意味ではそれも正しいであらう。しかし黙讀するといふ時、心の中には音聲を考へてゐるといふ大事實を忘れてはならない。前にも述べた通り、既に「言語」となつた以上は内容と音聲とを切離すことが出来ない。動物とか頭腦發達程度の低い人とかが考へる漠然たる觀念や、又は發達した人でも咄嗟の際働く心の作用には言語の伴はないこともあるだらうが、はつきりした思考にははつきりした言語が伴はなければならぬこと、言語心理學者の説く不動の

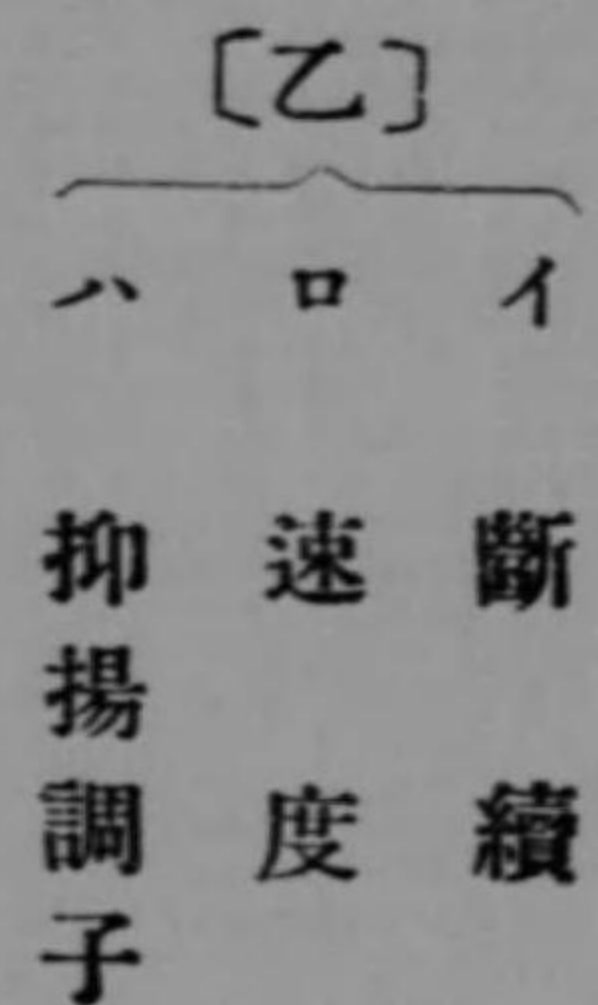
眞理である。内容を眞によく理解鑑賞せんがためには之に伴ふ音聲の斷續速度、抑揚調子までも思ひ浮べなければ出来ないのである。即ち謂はゞ「心」の中で「朗讀」するのが眞の黙讀である。實地に口を動かして發音しなくても眞の黙讀が出来れば、理解鑑賞の大部分が出来たといつてもよいが、尙その上に實地に口を動かして發音すれば、一層確かになる。現に他人の一人も居ない室で書を読む人が會心の章に出逢つた時、著者の心に共鳴した時、思はず案を打つて快哉を呼ぶのみならず、その文を口に誦して見る事は屢、起る事實である。況して他人にも聽かせ共に利益も楽しみも得ようといふ時、最も良い朗讀法が必要であること勿論である。かくて朗讀に熟達すれば、延いては社交上の會話にも演説にも講話訓話にも助けとなるのである。

## 音聲各項の解説

前に擧げた表を再び略記すれば、

[甲] イ 發 音  
ロ アクセント

音聲



となる。次にその各項について解説する。

[甲] (1) 發音

本書では片假名を發音符號として使ふ。即ち發音する通りに片假名で書替へる。所が發音では別々な音であつて從來の假名で之を書分けることの出来ないものがある。この時は止を得ず本書で特別な字形を使ふ。

ガギグゲゴ

ガギグゲゴ 之は所謂鼻に通ずる子音を表す。

例 [數字は讀本のページ]

ガギグゲゴ(鼻に通じないもの、即ち軟口蓋と舌の後部との接觸による有聲破裂音を含むもの)の例

ガッコオ(學校) 17 20

ギン(銀) 17

グンカン(軍艦) 19

ゲンキ(元氣) 17

ゴチソオ(御馳走) 36      ゴキゲンヨオ(御機嫌良う) 37

ゴロゴロ(雷の音) 43      ゴランナサイ(御覽) 45      ゴ(五) 44

ガギグゲゴ(鼻に通ずる子音を含むもの)の例

サクラガ(櫻が) 3      [このてにをのはのはこの外に澤山あるから省く]

アガル(上) 13      フリナガラ(振) 23      アリガトオ(有難) 25 53      ニガイ(苦) 33

オアガリ(上) 35      サガシテ(探) 38      ヒロガリ(廣) 42      アサガオ(朝顔) 45

ナガレテ(流) 55      オニガシマ(鬼島) 59

ヤナギ(柳) 26 47      ニギヤカ(賑) 36      スキノキ(杉木) 46      ウサギ(兎) 48

スグ(直) 25 52

ニグテ(逃) 29      オミヤゲ(御土産) 36      アゲマシタ(上) 39 52

ゴキゲンヨオ(御機嫌良) 37      ニグラレマセン(逃) 52

ヒキアゲマシタ(引揚) 74

ウゴイテ(動) 28 ヒゴイ(緋鯉) 44 オオゴエ(大聲) 52

キビダンゴ、オダンゴ(團子) 59 60 カケゴエ(掛聲) 76

注意。今日我が國各地方の方言の中、鼻にかゝるガギグゴを使はないものがある。かういふ地方では朗讀指導の際必ずしもガギグゴを無理に出させないでもよい。その反對にガガ等を區別する地方では必ず正しく之を言ひ分けさせなければならぬ。從來往々にして文字に囚はれてガギグゴは鼻に通じない音を出す方が「正しいのだ」と考へ、わざ／＼ガ等をガ等に改めさせる人があつた。之は甚しい誤りである。

つ

之は所謂促音の符號である。「ツ」は通例のtsuを表す。故に『三つ』は「ミツツ」と書表す。「ツツキマシタ」(讀本六九頁)はtsuの音が二つ重なる。「ツツツキマシタ」(讀本には無い)と區別する。

ン

詳しくいへば各單語によりそれ／＼nmng等の別々の音を使ふが、今は之を區別せずにンで一括して表す。但し『ウマレマシタ』(讀本五七頁)は「ンマレマシ

タ」と書替へる。これmmareとm音を發するからである。わざ／＼「ウマレ」(u-ma-re)と發音しないでよい。

ヘエタイ等

『ヘエタイ』(讀本五頁)『キレイ』(同一二頁)『オホゼイ』(同一九頁、三六頁)『イツシャウケンメイ』(同五三頁、七一頁)『オレイ』(同五三頁、七三頁)はそれ／＼「ヘエ」「レイ」「ゼエ」「メエ」と發音する。これ今日東京その他多くの地方の發音慣習である。日常語の發音の標準は發音を基とすべきである。文字を基にするのは逆である。而して實際に慣習として存在する中から或者を採用して標準とすべきである。但し日常自然の談話に餘り多く使はない漢語「精華」「提携」の如きは文字を用ひる方が多いため、字音假名遣に従つて「セイ」「テイ」等と發音するのが慣習となつてゐる。『キレイ』『ヘエタイ』の如き日常頻繁に使ふ平易な口語を「レイ」「ヘイ」等と發音するのは不自然である。

ユキコサン(雪子さん)デカケマシタ等

△キシ等左側の△は母音の無聲化することを示す。通常の速度で言葉を言ふ時常に無聲化するもの(……マシタ)ツキユキコ等と特に速く言ふ時に限つて無聲

化するもの(ココマデ等)との區別がある。讀本の朗讀には前者だけに限る方がよい。但し或地方(殊に我が國西部方言)に於て無聲化しない慣習のあるものはその儘慣習に従つて差支ない。文の終アリマス等のスは母音が無聲化するこ  
とが多い。

ズヅとジヂ

『ズ』『ヅ』といふ假名は全く同じ發音を表す。『ジ』『ヂ』も之と同じく區別がない。本書では『ズ』『ジ』の符號を以て之を表す。

以上の外本書で發音符號として用ひた假名はそれ〴〵通常のその假名で表される音の符號である。一々の説明は省く。讀者もし必要があれば、諸種の音聲學の參考書について研究されたい。

(ロ) アクセント

アクセントとは聲の高低の比較的關係である。例へばアメ(雨)といふ語でアの方がメよりも比較的に高いといふことをアクセントといふ。實際どの位高いか、

例へば音階で re | do か mi | do か so | do か等のどれであるかは定まつてゐない唯アの方がメよりも高ければよいのである。

アクセントは又各の單語について定まつてゐる。アクセントの研究にはアメを一つの單語とすると共にアメガ(雨が)も一つの單語とすることが必要である。その他一般に名詞にテニヲハの附いたものを各一つの單語とする。故にアメとアメガとは別々の二つの單語である。動詞に助動詞や助詞の附いたものもそれ〴〵一つの單語とする。故にヨム(讀)とヨンダとヨムトとは別々の三つの單語になる。アクセントはかゝる別々の單語について一々別々に定まつてゐる。本書の發音表記にはかゝる意味の單語を一續きに記す。例へば、

ガッコオノ モンガ ミエマス

而してその各單語につきアクセントの聲の高い部分を示すためその假名の右側に縦線を附ける。

モンガ タダイマ カタツムリ 等

この様に高い部分を含む單語のアクセントを起伏式アクセントと名づける。

オミヤ(御宮) アガル(上) マンマルイ(眞圓)

右の様な單語は高低の差を附ける慣習が無い。これらを平板式アクセントと名づける。

アクセントは各單語に定まつて居るといふ。これは誰でも又如何なる場合でもこの單語を發音する時一定の高低關係を附けるといふ意味である。(どの位高くするかは一定しないこと前に述べた。)従つて

## ユキコサンデスカ

といふ言葉で終の部分所謂尻上がり調子でいふと「カ」の聲は高くなる。しかしこの單語は常にカを高くいふと定まつてゐない場合によつて尻下がりに云ひ「カ」が低くなることもある。斯の如く場合によつて變化する高低は單語に「定まつて居る」とはいへない。故に之はアクセントではない之を「言葉調子」と名づけてアクセントと區別する。

## アメガ フル (雨が降る)

アクセントは各單語についていふ。故に右の例で「アメガ」の「ア」はこの「雨」といふ一つの單語の中で他の部分(「メガ」)よりも比較的高いといふだけである。「フル」の「フ」もこの「降る」といふ一つの單語の中で「ル」よりも高いといふだけである。従つて

「アメガ」の「ア」と「フル」の「フ」とどちらが高いかといふ事は全く問題にならない。この「ア」と「フ」とどちらが高いかは所謂言葉調子に屬する事柄である。即ち「雪」ではない「雨」が降るのだと「アメガ」を強くいふ時は「ア」が著しく高い。「止む」ではない「降る」のだと「フル」を強くいふ時は「フ」の方が「ア」よりも著しく高い。即ちこの通り場合によつて高低が變化するのだから言葉調子である。一つの文章についてアクセントの高低を實際どの位の高さに發音するかといふことは一般的な規則を以ていふことが出来ない。各特殊の文章毎にその意味や心持に従つて考へなければならぬ。本書では之を「乙」の特殊的の項目の中で説く。

## ワット プット バット

の様な種類の語はアクセント不定である。即ち場合によつて色々な高低を附けるのである。

本書は現代東京語におけるアクセントの慣習を表記する。國定教科書の語句言葉遣ひは東京語に基づき之を以て標準としてあるから、アクセントも東京の慣習を探るのが合理的である。從來世間には之を誤解して「東京のアクセントが何故に良いのか、何故に正しいのか」と疑問を抱く人があつた。勿論東京語のアクセン

トがそれ自身本質的に他よりも良い正しいといふ理由は全く無い。而して同時にそれ自身本質的に他よりも悪いといふ理由も無いのである。即ち各地の方言のアクセントは皆同等なのである。然らば言葉遣ひの標準を東京語から採つた以上アクセントの標準をも東京語に採ること自然の歸結であるといはなければならぬ。

## 〔乙〕 (イ) 斷續

本書には各單語に従つて例へば

グンカンノ エオ カキマシタ

の様に切つて表記するが、之は必ずしも朗讀の際常に聲を切るといふ意味ではない。單語とは多くの場合の實地の言葉を比較總合して聲を切り得る最短部分を取り出して之を單語と名づけたものである。この意味では一般的抽象的のものである。各特殊の文章に於ては二箇以上の單語を一續きに發音し、聲の切れ目を附けないものが多い。故に何處を續けるか切るか各特殊の文章に就いて考へなければならぬ。これ本書で「特殊的條件〔乙〕」として記すわけである。

先づ第一に所謂文法上の「文」の終り、即ち文字で書いて、點のある所は必ず聲を

切る。之は本書でこの二重横線を以て示す。

その他は各課について一々別に記した。

## (ロ) 速度

## (ハ) 抑揚調子

これらも亦一々特殊の文章について考へるべきものである。各課に一々之を記した。

以上〔乙〕即ち特殊的條件の項目の下で本書に記すことは一つの参考に過ぎない。各指導者の意見によつて多少の異なる所が有つて差支ないのである。是等の點については

神保格著 話言葉の研究と實際 明治圖書株式會社發行

に詳しく述べた、参考していただければ幸である。

最後に再び繰返して言ひたい。右の乙に入れた特殊的條件は各の文章によつて色々に變る。而してその特殊な文章の「内容」即ちその文章に表現された特殊の思想感情を最も良く表し得る様に斷續・速度・抑揚調子を附け得た時之を最も良い



朗讀法とするのである。この點について本書に記す注意は最も良い朗讀が出来上つた時の有様をいふのである。學校等で讀本を教へ指導する際、完成に向ふ途中の段階に於いては前記乙と記した特殊の條件を始めから理想的に良く行はせることが困難なこともあらう。その時は先づ甲の一般的條件即ち正しい發音とアクセントに力を注ぎ、殊に一々の單語又は句について之を練習し、之が出来て後全文の内容を考へて適當に斷續・速度・抑揚調子を工夫する等の方法を用ひることが必要であらう。

シ<sup>ョ</sup>オガク

コクゴドクホン マキノ イチ

ジンジ<sup>ョ</sup>オカヨオ モンブシ<sup>ョ</sup>オ

注 「トクホン」とトを「清音」に言ふのを採用しないことにする。  
「マキイチ」といはないことにする。

サイタ サイタ サクラガ サイタ

[甲] (イ) 發音 サクラガのガについては本書八頁を見よ。

(ロ) アクセント すべて平板式アクセントである。

参考 サイタは「裂いた」の意、サクラは地名「佐倉」等である。

[乙] (イ) 斷續 サイタサイタの次で切るべきである。二つのサイタの間は切つてもよし續けてもよい。サクラガの次は切らない方がよいであらう。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 通常。但し一面に咲いた満開の花を見て感歎する心が表れれば尙よいであらう。

コイ コイ シロコイ

[甲] (イ) 發音 記すべきことなし。

(ロ) アクセント シロコイと続けていふ時コはあまり高くならないことがある。

[乙] (イ) 斷續 コイコイの次で切るべきである。コイ<コイの間<符は續けてもよい。シロコイは續ける方がよいであらう。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 通常。但し犬を呼ぶといふ心で、元氣のよい聲を使ふべきであらう。

ススメ ススメ ヘエタイ ススメ

[甲] (イ) 發音 ススメの始めのスの母音が無聲化することがあるが、朗讀に

は無聲化させない方がよいであらう。

ヘエタイはヘエタイと言はない方がよい。(本書一頁参照)

(ロ) アクセント すべて平板式。

[乙] (イ) 斷續 二回繰返すススメススメの間は切つた方がよいであらう。

前課のコイコイは日常生活の自然の言葉で續けていふことがあるが、ススメは必ずしもさうでない。ヘエタイススメは續けた方がよいであらう。さうすると、



といふリズムになる。兵士行進の歩調を思はせる様にこのリズムを明かにいふのも面白いであらう。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 通常。但し之も元氣のよい聲で。

オヒサマ アカイ アサヒガ アカイ

[甲]

- (イ) 發音 オヒサマのヒの母音が屢々無聲化する。
- (ロ) アクセント アサヒ、朝の太陽の意の時はアサヒといふのが從來のアクセント慣習である。アサヒといふアクセントは新聞の名、煙草の名の時に使はれる。但し、朝の太陽の意の時にはアサヒといふアクセントを使ふ類推が行はれる傾向がある。今暫く從來の慣習に従ふ。

[乙]

- (イ) 斷續 オヒサマアカイの次で切り、その他は續ける方がよい。
- (ロ) 速度 通常。
- (ハ) 抑揚調子 通常。

ヒノマルノ ハタ バンザイ バンザイ

[甲]

- (イ) 發音 記すべきことなし。
- (ロ) アクセント すべて平板式。但し日常自然の言葉で萬歳を大聲に三唱する時「ザ」に力を入れて而も「ザイ」と長く延すことが屢々行はれる。聲を強くするに伴ひ調子も自然之に伴つて高くなるため、單語として思出した時「バンザイ」の様な型を連想することがある。併し一方「萬歳を唱へる」を「バンザイオ」と平板式にいふのが通常である。故に「バンザイ」は平板式とする。

[乙]

- (イ) 斷續 ヒノマルノハタは一續きにいふべきである。「ハタ」の次は切る。バンザイ<バンザイの間<符は切る方がよい。
- (ロ) 速度 通常。但しバンザイは次のハにいふ如く稍強く言ふならば多少速く言つてもよい。
- (ハ) 抑揚調子 通常。但しバンザイは多少強くいふ。又終りのバンザイは第一のバンザイに比べて更に一層強く言ふのも面白いであらう。

八頁

トマレ トマレ ナノハナニ

[甲] (イ) 發音 記すべきことなし。

(ロ) アクセント ナノハナニは一つの單語として「ナ」だけを高くする。ナノハナニといへば二語となる。二語の如く發音すると「葉ではない。花の方に止れ」といふ様な意味に聞えて宜しくない。

[乙] (イ) 斷續 トマレトマレの次で切る。トマレ<トマレの間は切つてもよし、續けてもよい。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 通常。

九頁

ハシレ ハシレ シロ カテ アカ カテ

[甲] (イ) 發音 記すべきことなし。

(ロ) アクセント シロカテ アカカテと續けて「シロ」アカを強める時はカテのかがあまり高くない。  
[乙] (イ) 斷續 ハシレハシレの次で切る。ハシレ<ハシレの間は切つてよい。但し應援のため急迫した心を表すため續けて言つてもよい。シロカテの次は切つた方がよい。  
(ロ) 速度 通常よりも稍速くいふ方がよく心持を表す。但し、餘り速いため發音の不明瞭を來さぬ注意が肝要である。  
(ハ) 抑揚調子 シロとアカを特に強めること。理由は明かであらう。

十頁

ココマデ オイデ ソロソロ オイデ

[甲] (イ) 發音 東京語その他でココマデの△コの母音が無聲化することがあるが、之を必ずしも標準にしないでよい。

(ロ) アクセント 特に記すべきことなし。

[乙] (イ) 斷續 ココマデオイデの次で切る。その他は續ける方がよい。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 自然の言葉で語氣を和らげるためオイデの終りで尻上がりの調子を使ふことが屢あるが、朗讀の際その調子を使ふと否とは随意としてよい。

十一頁

ハト ハト オミヤノ ヤネカラ オリテ コイ

[甲] (イ) 發音 記すべきことなし。

(ロ) アクセント オリテ コイ。續けて言ふ時コイのコが餘り高くならない。

[乙] (イ) 斷續 ハト<ハトの次で切る。<の所は切る方がよい様に思はれる。元來ハトハトといふ本文は稍不自然の感がある。子供が鳩を呼ぶ時はハトヤといふ方が自然であらう。オミヤノヤネカラは續ける方がよい。カラの次は切つても良い。

(ロ) 速度 通常。

十二頁

(ハ) 抑揚調子 ヤネを餘り強めない方がよい。又コイも強めてはよくない。特に「下りて行け」等と對照する時はコイを強めるが、此處はさうでないからである。

ソラガ ハレタ キレエニ ハレタ

ヒロイ ノハラデ ウシガ ナク

[甲] (イ) 發音 キレエ、讀本五頁のヘタイと同じ。キレイといはない。

(ロ) アクセント ハレタ「晴」の意の時はこのアクセントである。

参考 「腫れた」の意の時はハレタと平板式である。ヒロイ、ヒロク ヒロカッタ。

[乙] (イ) 斷續 ハレタの次で切る、二箇處とも。ノハラデの次は切つても續けてもよい。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 通常。但し強ひていへば、キレイエニハレタの方はキレイエニ

の方を稍強める。ハレタはソラガハレタといふ方に既に言つたからである。

ピ|イ|チ|ク      ピ|イ|チ|ク      ヒ|バ|リ|ガ      ア|ガ|ル|      
テ|ン|マ|デ      ア|ガ|ル|    

[甲] (イ) 發音      △チは母音の無聲化する方が自然である。

(ロ) アクセント 記すべきことなし。

[乙] (イ) 斷續      ビイチク<ビイチクの終で切る。<の處は切つても續けてもよい。アガルの次も切る。その他は切らない方がよい。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 通常。但し強ひていへば、テンマデを稍強める。

カ|ア|カ|ア      カ|ラ|ス|ガ      ナ|イ|テ      イ|ク|      
カ|ア|カ|ア      カ|ラ|ス|ガ      ト|ン|デ      イ|ク|    

[甲] (イ) 發音 記すべきことなし。

(ロ) アクセント 記すべきことなし。

[乙] (イ) 斷續      カアカアの次は切つても續けてもよい。カラスガの次も切つても續けてもよい。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 通常。

デ|タ      デ|タ      ツ|キ|ガ      マ|ル|イ      マ|ル|イ  
マ|ン|マ|ル|イ      ツ|キ|ガ|    

[甲] (イ) 發音      △ツキのッは母音の無聲化するのが通常である。

(ロ) アクセント 参考      マンマルナといふ語はこの表記の型である。

[乙] (イ) 斷續      デタク<デタの次は切る方がよいであらう。續けると「出た月」といふ連體形を以て月を形容する意味に聞え易い、これは本文の意味とちがふ。デタクの次は切つても續けてもよい。ツキガの

次で切る。マルイマルイの次で切る。(この處は続ける方がよい、  
「眞に丸い」といふ強めを表す。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 通常。

オトオサン イッテ マイリマス

オカアサン イッテ マイリマス

タロオサシタ デカケマシタ

[甲] (イ) 發音 「オトウサン」はオトオサンと發音する。オトウ……とウを  
出さないこと勿論である。

(ロ) アクセント イッテマイリマス續けていふ時はイッテマイリマスの  
様になる。

[乙] (イ) 斷續 オトオサン、オカアサンの次は切らない方がよいであらう。  
兒童の自然の言葉でも多くは切らない。

(ロ) 速度 通常。  
(ハ) 抑揚調子 イッテマイリマスの方を稍強める。之も兒童の自然の言  
葉に多い。

ガッコオノ モンガ ミエマス

ミンナガ ゲンキ ヨク アルイテ イキマス

[甲] (イ) 發音 「イ」と「エ」との區別の明かでない方言では「ミエマス」の「ミエ」が稍  
困難であらう。「ミイマス」「メエマス」等にならぬ様練習を要する。

(ロ) アクセント ゲンキヨクの「ヨ」と「アルイテイキマス」のキマとは續けて  
いふ時高くない。

[乙] (イ) 斷續 ガッコオノモンガは必ず續ける。モンガの次は切つてもよ  
いが、成る可く續けたい。ゲンキヨクの次も成る可く續けたい。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 ガッコオノとモンガとは同じ位の強さ、ゲンキヨクとアル



イテとも同じ位の強さにいふ。

十八頁

ミナ|サン ホン|オ オア|ケナ|サイ  
タ|ロオ|サン オヨ|ミナ|サイ

[甲]

(イ) 發音 「ホンオ」の「オ」を「ウオ」の様に云はないでよい。(或地方で自然に「ウオ」を使ふならば、その地方ではそれに従つてよい。)

(ロ) アクセント 記すべきことなし。

[乙]

(イ) 斷續 ミナサンとタロオサンとの次、點のある處を切る。オアケナサイの次に稍長い休止を置くと、兒童が本を開く時間を表すことになつて良いであらう。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 ミナサンの終、タロオサンの終で尻上がり△の調子にしてもよい。オアケナサイ、オヨミナサイの次は尻下がり△の方がよいであらう。ホンオとオアケナサイとは同じ位の強さにいふ。

十九頁

タ|ロオ|サン|ガ グン|カン|ノ エ|オ カ|キマ|シタ  
ハ|ナコ|サン|ガ フ|ジサン|ノ エ|オ カ|キマ|シタ

[甲]

(イ) 發音 記すべきことなし。

(ロ) アクセント 参考 エオ、平板式にいふと「柄を」の意になる。

[乙]

(イ) 斷續 タロオサンガの次、ハナコサンガの次で切る。グンカンノエオとフジサンノエオとは續ける。グンカンノの次で切つてエオカキマシタと續けるのは良くない。フジサン云々も同様である。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 通常。

二十頁

タ|ロオ|サン|ガ ガ|つコ|オカラ カ|エリ|マシタ  
オト|オサン タ|ダイ|マ  
オカ|アサン タ|ダイ|マ

[甲]

(イ) 發音 カエリマシタをカイリマシタと發音すること東京その他の俗語に屢行はれる。「カエ……」と發音する方がよい。

(ロ) アクセント タダイマ、別々にすればタダ(唯)イマ(今)であるが、挨拶の語としては常に續けてタダイマといふ型になる。

[乙]

(イ) 斷續 タロオサンの次で切る。オトオサンとオカアサンとの次は續けた方がよい。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 讀本十六頁の例と同じくオトオサン、オカアサンといふ呼びかけよりもタダイマの方を稍強くいふ。

△ヒコオキ ヒコオキ

アオイ ソラニ ギンノ ツバサ

△ヒコオキ ハヤイナ

[甲]

(イ) 發音

△ヒコオキのヒは母音が無聲化することが多い。

[乙]

(ロ) アクセント アオイ、ハヤイ。参考 アオク、ハヤク。

(イ) 斷續 ヒコオキヒコオキと二回いふその間は切らない方がよい。

終のヒコオキ<ハヤイナの<の處は切つても續けてもよい。

(ロ) 速度 始めのヒコオキヒコオキは稍速くいふ。碧空に飛行機を見つけて喜びの聲をあげる心である。アオイソラニ以下は美しい色の對照を眺める心や速い勇ましさの感歎の聲として讀み方は速くない方がよい。

(ハ) 抑揚調子 始めのヒコオキヒコオキは稍速いと共に稍大きくいふ方がよい。終のハヤイナも感歎の心を表す様にいひたい。

マサオサ<sup>△</sup>ンガ オジサンノ トコロエ

オツカ<sup>△</sup>イニ イキマス

ポチガ オオ フリナガラ アトニ ナリ

サキニ ナリシテ ツイテ イキマス

[甲] (イ) 發音 オオ、純粹に發音だけを考へれば、オの長音である。

(ロ) アクセント オジサンノトコロエ、續けていふ時この表記の様な型になる。オツカイニイキマスも同様。アトニナリ、續けていふ時ナリのナが餘り高くない。サキニナリシテ、續けていふ時この表記の様になる。

ツイテ(附)。参考 ツイテ(平板)は、突いての意。

[乙]

(イ) 斷續 マサオサンの次で切る。トコロエの次では切つてもよいが成るべく續けたい。マサオサンがオジサンノトコロエと續けてその次で切るのは良くない。フリナガラの次で切る。アトニナリの次は切らない方がよい。サキニナリシテの次は切つてもよい。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 オジサンノトコロエとオツカイニとは同じ位の強さ。ボチガとオオとも同じ位の強さ。アトニとサキニとも同じ位の強さ。調子は通常。

モシモシ ユキコサンデスカ

ハイ ソオデス

ワタクシワ ハナコデス イマ

キヌコサング キテ イラッシャイマス

アナタモ アソビニ イラッシャイマセンカ

ハイ アリガトオ スグ マイリマス

[甲] (イ) 發音 キヌコサンのヌが曖昧になつて「キンコ」となり易い。練習を要する。俗語ではキテエラッシャイマスといふことが屢ある。

ヘエタイの例と同じ傾向である。朗讀には、はつきりイラッシャ

イといふべきである。アツビニ、俗語でアスビニといふことが多い。こゝは標準語としてアツビニの發音を學ばせるべきである。

- (ロ) アクセント モシモシ、別々にいへばモシ、モシである。電話の時は必ず二回續けてモシモシといふ。ユキコ、ハナコ、普通名詞の「雪」「花」はユキ、ハナである。キヌコ、普通名詞の「絹」はキヌである。キテイラッシャイマス、續けていふ時イラッシャイマスのアクセントが高くなならない。スグマイリマス、續けていふ時マイリマスのアクセントが高くなならない。

[乙]

- (イ) 斷續 モシモシの次は切らないでもよい。たゞ、電話の言葉として特にはつきりいふ練習には切る方が良からう。ハイソオデスの間は切らない。ハイアリガトオの間も切らない方がよい。

- (ロ) 速度 電話の言葉としては稍ゆつくりいふ方がよいであらう。
- (ハ) 抑揚調子 ハナコデスを強く、キヌコサンとキテとは同じ位強く、スグを強くいふ。調子は自然の會話と同じにしなければならぬ。モシモシ(もし切るならば)の次、ユキコサンデスカの次、イラッシャ

イマセンカの次、いづれも尻上りの調子にいふべきである。

ヤナギノ エダニ トビツク カエル  
 イッペン ニヘン サンベン シヘン  
 トオトオ エダニ トビツイタ

[甲]

- (イ) 發音 カエル、俗語でカイルといふことがある。正しくカエルといふ方がよい。「四ヘン」を「ヨンヘン」など、いつてはいけない。
- (ロ) アクセント トビツク、ツの母音が無聲化するためトビツクと發音することがある。「一ペン」以下「四ヘン」まで平板式にいふこともある。どちらでも良い。トオトオ、特に強めていふ時トオトオと二回高くすることもあるが、此處でその必要はない。

[乙]

- (イ) 斷續 エダニの次で切つてもよい、「一ペン、ニヘン」等の各の次は稍長い休止を置いてよい、蛙の飛び上る試みの間隔を示す心である。トオトオの次は切らない方がよいであらう。但しトオトオ

エダニと續けて次を切るのは良くない。

- (ロ) 速度 通常。但し「一ペン」「二ペン」等は稍ゆつくり云つてもよい。
- (ハ) 抑揚調子 トオトオとエダニとを稍強いふ。調子は通常。

二十七頁

デン|デンムシムシ カタツムリ  
ツノ|ダセ ヤリダセ メダマダセ

- [甲] (イ) 發音 記すべきことなし。

(ロ) アクセント ツノ|ダセ等、別々にはツノ|ダセ ヤリ(平)ダセ メダマダセである。昔から兒童の間に傳はつた童謡風の文句では必ず右の様に續けて右の本文のアクセントの型となつてゐる。それに従ふがよい。

- [乙] (イ) 斷續 デンデンムシムシと續けて次で切る。カタツムリの次で切る。ツノダセヤリダセと續けて次で切る。ツノダセの次で切つて三つの「出せ」を別々にいふのは面白くない。従つて全體に八五

二十八頁

の調のはつきりしたりリズムを附ける方がよい。

- (ロ) 速度 通常。
- (ハ) 抑揚調子 通常。

アメ|ガ ヤミ|マシタ  
スズ|シイ カゼ|ガ フイ|テ キマ|ス  
キノ|ハガ ソ|ヨソヨ ウ|ゴイテ イマ|ス

- [甲] (イ) 發音 記すべきことなし。
- (ロ) アクセント

参考 アメ(平)は「飴」の意。スズシイ、スズシク。フイテ(平)は「拭いて」の意。フイテキマス、ウゴイテイマス、續けていふ時キマス、イマスのアクセントが高くならない。

- [乙] (イ) 斷續 キノハガの次で切つてよい。但しキノハガソヨソヨと續けてその次で切るのは良くない。

(ロ) 速度 通常。  
 (ハ) 抑揚調子 スズシイとカゼとフイテと三つ同じ位の強さ。ソヨソヨとウゴイテとも同じ位の強さ。調子は通常。

メダカサン メダカサン オオゼエ ヨッテ  
 ナンノ ソオダン  
 ア ミンナガ ワット ニゲテ イッタ

[甲] (イ) 發音 オオゼエ、讀本五頁のヘエタイと同じ例である。オオゼイといふのは不自然である。(本書一頁参照)。ア、極めて短く發音する。

(ロ) アクセント  
 参考 ヨッテは「酔つて」「選つて」の意。ワットはアクセント不定である。ワを高く云つても、全體を平板に云つてもよい。

[乙] (イ) 斷續 二度云ふメダカサンの間は切らない方がよいであらう。ヨッ

テの次も切りたくない。ソオダンからアへ移る間は稍長い休止を置くと面白い。「何の相談」と言ひつゝ(或は考へつゝ)ぢつと眺めてゐる心、而して急にばつと散亂する突然の心を示すことが出來、この休止によりアといふ聲が生きて來る。ミンナガの次は切らない。

(ロ) 速度 通常。但し、ワットニゲテイッタは多少速くいふのも面白いであらう。

(ハ) 抑揚調子 同一の文章の中に「ア」と「ワット」と二つ同様な語のあるのは抑揚がむづかしい。寧ろ始めのアは弱く、ワットを強くいふ方がよいであらう。調子はソオダンの終は尻上がりの調子に云ふ方が語氣が優しく聞える。その時はメダカサンの終を上げない方がよい。もしメダカサンの終を尻上り調子でいふならば、ソオダンの終を下げる方がよい。兩方とも上げるのはやゝ可笑しい。

プウト フクレル シャボンダマ

三十一頁

ク|ル|ク|ル    マ|ワ|ル|    ア|カ|ガ|    デ|ル|  
 ク|ル|ク|ル    マ|ワ|ル|    ア|オ|ガ|    デ|ル|  
 フ|ワ|リ|ト    ウ|イ|テ    ド|コ|エ    イ|ク|  
 カ|ゼ|ニ    ユ|ラ|レ|テ    バ|ツ|ト    キ|エ|タ|

[甲]

(イ) 發音    ブウト、臨時にブウを稍長く延ばしていふも面白いであらう。  
 マワル、俗語で屢マアルといふが、はつきりワを發音する方がよい。  
 (ロ) アクセント    ブウト、アクセント不定。クルクル、特に強く云ふ時クル  
 クルと二回高く云ふことがあるが、此處ではその必要が無い。ア  
 カガ、之をアカガデルといふと垢が出るの意になる。アカカテ(讀  
 本九頁参照)。    フワリト又はフワリトといつても良い。バットは  
 アクセント不定。バを高く云つても全體を平板に云つてもよい。  
 [乙] (イ) 斷續    シャボンダマの次、マワルの次、デルの次、イクの次で切る。ウ

イテ、ユラレテの次は切つても續けてもよい。ドコエイクの次で  
 稍長い休止を置くのも面白いであらう。浮いて飛んで行くのを  
 見つめる心を表す。  
 (ロ) 速度    通常。但しバットキエタを多少速く云つてもよい。  
 (ハ) 抑揚調子    アカガ、アオガを稍強くいふ。ドコエも稍強く。バットも  
 稍強く。調子は通常。ドコエイクの終は下げる方がよい。

三十二頁

ア|チ|ラ|デ|モ    コ|チ|ラ|デ|モ    ホ|タ|ル|オ    ヨ|ブ|  
 コ|エ|ガ    シ|マ|ス|

三十三頁

ホ    ホ    ホ|タ|ル    コ|イ|    ア|ツ|チ|ノ    ミ|ズ|ワ|  
 ニ|ガ|イ|ゾ|  
 コ|ツ|チ|ノ    ミ|ズ|ワ    ア|マ|イ|ゾ|  
 ホ    ホ    ホ|タ|ル    コ|イ|

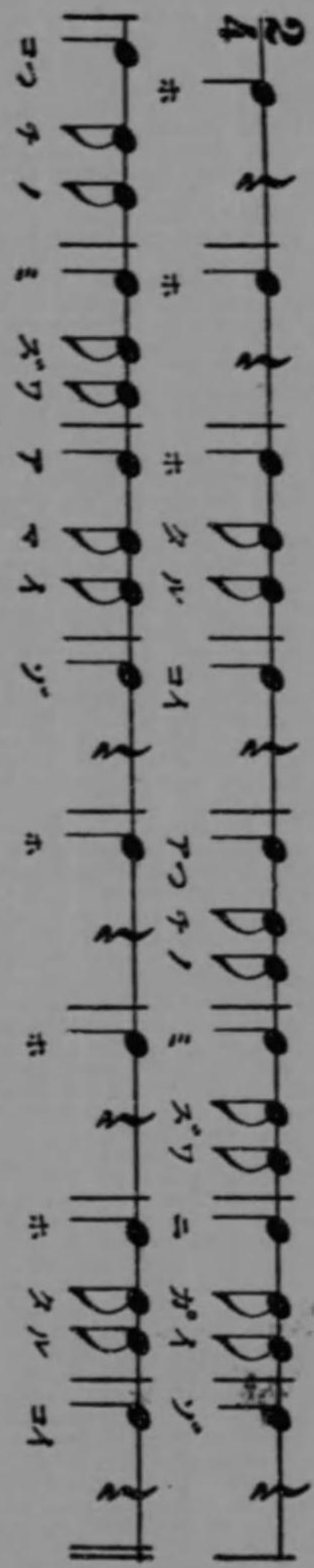
[甲]

(イ) 發音 記すべきことなし。  
(ロ) アクセント ヨブコエガ續けていふ時この様な型になる。コエガシ

マス、續けていふ時シマスのマが高くならない。ホタルコイ、續けていふ時はコイのコが餘り高くなる。アマイゾ、アマイ、單獨にいふ時は平板式である。

[乙]

(イ) 斷續 始めからコチラデモまで續ける。ホタルオヨブ、切るならばヨブの次で切る方がよい。歌のリズムは



となる。朗讀の時もこのリズムを附ける方が面白いであらう。しかし指導者の考により、普通の談話の通り云つても差支ない。但しホ、ホ、ホタルを拙劣によむと、吃音の様に聞えて可笑しいであらう。

(ロ) 速度 通常。  
(ハ) 抑揚調子 通常。ホホホタル云々の唄に前記のリズムを附けるか、又は更に進んで音楽の旋律を附けるかは指導者の隨意である。

△シ タキリスズメ オヤドワ ドコダ  
△シ タキリスズメ オヤドワ ドコダ  
△シ タキリスズメ オヤドワ ドコダ

オジイサン ヨク キテ クダサイマシタ  
サア オアガリクダサイ  
スズメワ オオヨロコビデ オジイサンオ

オザシキエ トオシマシタ イロイロ  
スズメガ オジイサンニ  
ゴチソオオ シマシタ  
オオゼエデ ニギヤカニ オドリマシタ



オミヤゲニ ツズラオ アゲマシタ  
 オジイサンワ タイソオ ヨロコビマシタ  
 サヨオナラ ゴキゲンヨオ  
 サヨオナラ マタ オイデクダサイ

[甲]

(イ) 發音 ヨクキテ、續けていふ時ヨクキテとクキ共に母音の無聲化する傾が(特に東部方言に)多い。これはクの方を無聲化させない様に注意すべきである。東京語で、注意してゆつくり發音する時、無聲化すべき條件(前後を無聲子音に挿まれた時)があつても、一方の音節は特に無聲化しない(クキの如く)のが通常である。

オオゼエ、讀本五頁のヘエタイと同じ類である。(本書一頁参照)  
 オオゼイといふのは不自然である。

(ロ) アクセント キテクダサイマシタ、續けていふ時クダサイマシタのアクセントが高くならない。マタ、日常の言葉では平板式である。

[乙]

マタの様にいふのは演説講演などの口調である。此處には調和しない。

(イ) 斷續 オヤドワドダから次のオジイサンへ移る間稍長い休止を置く、この間の事柄を文章の上で省略したからである。同様にオアガリクダサイの次、トオシマシタの次、ゴチソオオシマシタの次、オドリマシタの次、アゲマシタの次、ヨロコビマシタの次、いづれも事柄が省略されてゐるので休止を置く。オオヨロコビデの次で切つてよい。

(ロ) 速度 老人の言葉は稍遅くいふと老人らしい心持が表はれるであらう。

(ハ) 抑揚調子 ヨクキテ云々のヨク、及びサアを特に強く且調子を高くいふ方がよい、雀の喜ぶ心がよく表れるからである。オオゼエとニギヤカとオドリと三つ同じ位の強さ。ツズラオを強める。タイソオを強める。マタを強める。

三十八頁

マ|サ|チ|ヤ|ン    ハ|コ|ニ|ワ|オ    ツ|ク|リ|マ|シ|ョ|オ>ト

ニ|イ|サ|ン|ガ    イ|イ|マ|シ|タ

ニ|イ|サ|ン|ワ    ハ|コ|オ    サ|ガ|シ|テ    キ|マ|シ|タ

ワ|タ|ク|シ|ワ    ツ|チ|ヤ    イ|シ|オ    ハ|コ|ビ|マ|シ|タ

ハ|コ|ニ    ツ|チ|オ    イ|レ|マ|シ|タ

ニ|イ|サ|ン|ワ    ツ|チ|デ    タ|カ|イ    ト|コ|ロ|オ

四十頁

ツ|ク|リ|マ|シ|タ

ソ|レ|ワ    ヤ|マ|デ|ス|ネ

ソ|オ|デ|ス

ヒ|ク|イ    ト|コ|ロ|ニ|ワ    カ|ワ|オ    ツ|ク|リ|マ|シ|タ

ヤ|マ|ニ    チ|イ|サ|イ    キ|オ    ゴ|ホ|ン    ウ|エ|マ|シ|タ

四十一頁

コ|ケ|モ    ツ|ケ|マ|シ|タ

カ|ワ|ノ    フ|チ|ニ    イ|シ|オ    ナ|ラ|ベ|マ|シ|タ

ハ|シ|モ    カ|ケ|マ|シ|タ

ス|ッ|カ|リ    デ|キ|テ|カ|ラ    オ|ジ|イ|サ|ン|ニ    ミ|テ

イ|タ|ダ|キ|マ|ス|ト

ホ|ホ|オ    ヨ|ク    デ|キ|タ|ネ>ト

ホ|メ|テ    ク|ダ|サ|イ|マ|シ|タ

[甲] (イ) 發音 フチニ、フの母音が無聲化するためフの子音が兩唇摩擦音となる。

(ロ) アクセント ハコニワオ、平板式及びハコニワオといふ型も同様に行はれる。どちらでも良い。サガシテキマシタ、續けていふ時この様な型になる。タカイトコロオ、續けていふ時トコロオのアクセ

ントが餘り高くならない。チイサイ。参考 チイサク、カワノ、ノ  
といふてにをはが附くと、カワ(川)のアクセントが平板式になる。

ヤマノ(山の)、ツチノ(土の)、イシノ(石の)、トコロノ(處の)、コケノ(苔の)、フチ  
ノ(縁の)、ハシノ(橋の)も同じである。スツカリ、主観的には第二音節  
(つ)から高くするつもりでいふが、つは實際の發音が出ない「促音」で  
あるから、カに至つて始めて高いアクセントが顯れる。デキテ。

参考 デキル。ミテイタダキマスト、續けていふ時、イタダキのア  
クセントが高くならない。ホホオ、アクセント不定。ホメテ。参  
考 ホメル。

〔乙〕

(イ)

斷續 マサチャンと呼び掛けの後を切る。ツクリマシヨオトトト  
は元來上の語に附けて發音するものである。人の言葉を自然の  
口調通りにいふ時に限り、トの前で一吋切る方が云ひ易い。(但し  
この時トを餘り強く云つてはいけない。)この意味を>この符號  
で示す。

ワタクシワ<ツチャ云々、ニイサンワ<ツチデ云々、ヤマニ<チイ

(ロ)

速度 通常。

サイ云々、これらの<の符號の所で切る。ワタクシワツチャイシ  
オと續けてその終りで切るのは良くない。

(ハ)

抑揚調子 マサチャン終は尻下りの方がよい。ハコオを強める。ツ  
チャイシオを強める。ハコニとツチオとは同じ位の強さ、タカイ

トコロオを強める。ヤマデスネのネは尻下がりの調子がよい。  
詳しく云へば、ネエと一旦上つて、更に下げる調子の方が通常であ  
る。カワオを強める。ゴホンを強める。フチニイシオのイシオ  
を強める。ヨクデキタネのネはやはり尻下がりの方がよい。(や  
はり詳しくは一旦上つてから更に下がる。)

イツノマニカ マツクロナ クモガ ソラ  
イツパイニ ヒロガリマシタ カゼガ サツト  
△フクト オオツブノ アメガ パラパラ

フリダシマシタ  
 オカアサンワ イソイデ アマドオ オシメニ  
 ナリマシタ  
 ナリマシタ<sup>△</sup> ヒカリマシタ<sup>△</sup>  
 オオキイ カミナリガ<sup>△</sup> ゴロゴロト  
 ナリマシタ<sup>△</sup> ワタクシワ ビックリシテ  
 オカアサンノ ソバエ カケヨリマシタ<sup>△</sup>  
 アメワ ザアザア フツテ キマシタ<sup>△</sup>

[甲]

(イ) 發音 記すべきことなし。

(ロ) アクセント イツノマニカ別々にはイツノマニカである。「氣の附かぬ中に」といふ様な意味の時は必ず續けてイツノマニカといふ。参考 一杯二杯と

[乙]

(イ)

斷續 數へる時は、イツバイである。フクト。参考 フイタ(吹いた)、拭ふの意味の時はフイタ(平)、フクト(平)である。オシメニナリマシタ續けていふ時はこの様な型になる。オオキイ。参考 オオキク、オオキナ。フツテキマシタ續けていふ時この型になる。

(ロ) 速度 餘り遅過ぎない様に讀むことが文の内容を表すに適當であらう。但し餘り速過ぎて發音の不明瞭を來さない注意も必要である。

(ハ) 抑揚調子 文の内容上、全體殊に強めるべき處を力強い聲でよむと良い。強めるべき處は、イツバイニ。オオツブノアメガ。インイデ

アマドオ。ピカリト。ゴロゴロト。ピツクリシテ。カケヨリマシタ。ザアザア。調子はすべて通常。

四十四頁

ヒゴイガ イマス  
イチ ニ サン シ ゴ ロク シチ ハテ

ク ジュウ

ジッピキ イマス

ジッピキ  
↓東京方言

[甲] (イ) 發音 ジッピキ、この方が昔からの東京語の慣習として日常自然の發音に使はれる。假名通りジッピキと發音する人も近來は増して來た、それでも良い。

(ロ) アクセント 一、二、三等の數字を別々に數として云ふ時はイチ ニ サン(平) シ ゴ(平) ロク シチ ハチ ク(平) ジュウである。  
この文の如く事物を一々指しつゝ數へる時や體操で番號を呼ぶ時等は右の本文に表記した様な型になる。殊に注意すべきはニ

四十五頁

イ シイ ゴオ クウの様に長音を使つて總てを二音節に發音する方がリズムの上から云ひ易く、且實際に日常行はれてゐる。朗讀の際もニイ、シイの如く長音を使つて差支へない。

[乙] (イ) 斷續 記すべきことなし。

(ロ) 速度 一、二、三と數へる速さは通常でもよし。又は泳ぎ廻つて居る魚を急いで數へる心で稍速く云つてもよいであらう。  
(ハ) 抑揚調子 ジッピキを強める。

アサガオガ サキマシタ  
イクツ サイタカ カゾエテ ゴランナサイ

ム<sup>△</sup>ヒ<sup>△</sup>ト<sup>△</sup>ツ フ<sup>△</sup>タ<sup>△</sup>ツ ミ<sup>△</sup>ツ ヨ<sup>△</sup>ツ イ<sup>△</sup>ツツ  
ナ<sup>△</sup>ナ<sup>△</sup>ツ ヤ<sup>△</sup>ツツ コ<sup>△</sup>コ<sup>△</sup>ノ<sup>△</sup>ツ ト<sup>△</sup>オ

[甲] (イ) 發音 イツツの始めのツの母音が無聲化してイツツとなることも

多い。その時アクセントの型が變る。ココノツ、速くいふ時始めのこの母音が無聲化することがある。之は朗讀の時無聲化させない様に注意する方がよい。

(ロ) アクセント カゾエテゴランナサイ、續けていふ時ゴランナサイのアクセントが高くならない。フタツ、ミツツ、ヨツツ、ムツツ、ヤツツ、トオ、是だけは副詞的に使ふ時(例へば「物を二つ下さい」「三つ見附けた」等)は平板式にいふ。此處は名詞的にフタツデス、ミツツダの例にならひこの型を使ふ。

[乙]

- (イ) 斷續 記すべきことなし。
- (ロ) 速度 通常。
- (ハ) 抑揚調子 アサガオとサキマシタとは同じ位の強さ。イタツを強める。調子は通常。

イチバンボシ ミツケタ

アレ アノ モリノ スギノキノ ウエニ  
 ニバンボシ ミツケタ  
 アレ アノ ドテノ ヤナギノキノ ウエニ  
 サンバンボシ ミツケタ  
 アレ アノ ヤマノ マツノキノ ウエニ

[甲]

- (イ) 發音 記すべきことなし。
- (ロ) アクセント アレ、此處では感動詞的の性質を含んで居るのでアレとなる。單に指示の意で「彼の品」といふ意の時は平板式である。スギノキノ、全體が合して一語となり「杉」といふ樹木の種類の名を表す時この型になる。別々にはスギノキノである。この様に別々にいふ時は「木」の意が強く聞えて「他の物でない、木である」といふ様になる。他の柳も松も同様、別々にはヤナギノキノ、マツノキノとなる。是等は皆合して一つの語とし、前記本文の表記の型

に發音する方がよい。ウエニ、又は平板式ウエニともいふ。ヤマノ(平)ノが附かなければ、ヤマである。ノが附くと、平板式になる。

(本書五四頁カワノ等参照)。

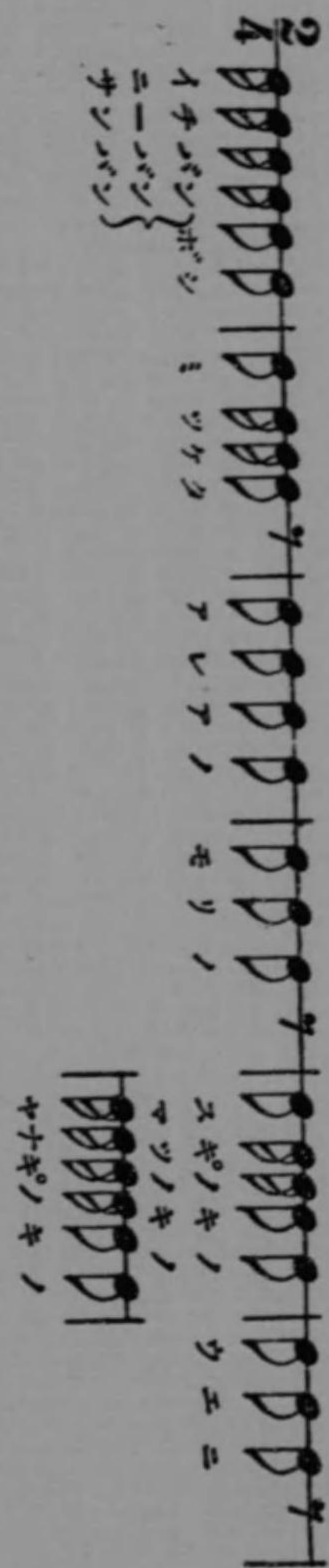
[乙]

切る。

(イ) 斷續 アレの次で切つても良い。モリノ、ドテノ、ヤマノの次でそれ

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子「杉の木」「柳の木」「松の木」を強める。調子通常。この文のリズムは



旋律を附けて唱歌とする時は勿論このリズムによるべきである。朗讀の時は必ずしも常にこのリズムに従はないでよい。但し一度はこのリズムを聞かせ、又は言はせて見るのが良いであらう。

アルヒ ウサギト カメガ カケッコオ

シマシタ アノ ノロイ カメニ マケル

ウサギワ ナイト オモイマシタ

コトワ トチュウデ ユツクリ ヒルネオ

ウサギワ トチュウデ ユツクリ ヒルネオ

シマシタ

カメワ スコシモ ヤスマナイデ

ハシリマシタ

トオトオ カメガ ウサギニ カチマシタ

[甲]

(イ) 發音 トオトオ之を假名の通りトウトウなどと讀んではいけない。

(ロ) アクセント カメ。参考 カメ(水を入れる器)カメノコ(亀)。マケル、コ

トワ、續けていふ時マケルコトワの型も使はれる。スコシモ、平板式が従来の東京語の慣習である。他の方言でスコシモといふ人もあるが、避けた方が良い。

[乙]

(イ) 斷續 アルヒの次で切る。カメガの次で切つても良い。ウサギワの次で切る。ノロイカメニの次で切つても良い。ナイトのトの前で切つてはいけない。ウサギワの次で切る。トチュウデの次は切つても良い。但しウサギワトチュウデと續けてその次を切つてはいけない。スコシモヤスマナイデの前後も之と同じ。トオトオの次で切る。トオトオカメガと續けてその次で切るのは良くない。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 ノロイカメニのカメニの方を強めるべきである。もしノロイを強めると、遅い龜と速い龜と二種あつてその遅い方の龜といふ様な意味に聞える。それは良くない。ナイトを稍強める。ユツクリとヒルネオと同じ位に強める。カメガをウサギニより

も稍強める。調子は通常。

シシガ | ネテ | イマシタ  
ネズミガ | シシノ | ソバオ | トオリマシタ  
シシガ | メオ | サマシテ | オオキナ | アシデ

ドオゾ | ハナシテ | クダサイト  
タノミマシタ | シシワ | ネズミオ

ハナシマシタ | ニサンニチ | タッテ | シシガ  
ワナニ | カカリマシタ | ドオシテモ  
ニゲラレマセン | シシワ | オオゴエデ



ウナリマシタ<sup>△</sup> ネズミワ ソノ コエオ  
 キツケテ<sup>△</sup> スグ ヤツテキマシタ<sup>△</sup>  
 シンサン<sup>△</sup> タスケテ アゲマシ<sup>△</sup>オ  
 ネズミワ イッシ<sup>△</sup>オケンメエニ ナッテ  
 ワナノ フトイ ナワオ カミキリマシタ<sup>△</sup>  
 シシワ ヨロコンデ  
 ネズミサン アリガトオト  
 オレエオ イイマシタ<sup>△</sup>

[甲] (イ) 發音 シンサン、第二のシは自然の言葉では多く母音が無聲化する。併し此處で次に「サ」の「ス」音が来る故、明瞭にするためシンサンと第二のシの母音を無聲化しないで發音する方が良い。イッシ<sup>△</sup>オケンメエ、オレエ、共に讀本五頁のヘエタイと同じ類である。イッ

シ<sup>△</sup>ケンメイとシ<sup>△</sup>を短く云ふ方が正しい(一)所。懸命から來た語だからといふ人があるが、その考は誤つてゐる。語源を以て正否の標準とすることは時に誤りを惹起す。現在の慣習が標準である。現在の慣習が語源と異なる時は慣習の方に従ふべきである。もし語源に従ふならば「下さい」は「下され」の略であるからクダサエといふ方が「正しい」ことになる。之は勿論誤りである。尤も東京の俗語にイッシ<sup>△</sup>ケメと短くする發音がある。之は避けた方が良い。

(ロ) アクセント ネテイマシタ<sup>△</sup>續けていふ時この型になる。メオサマシテ<sup>△</sup>續けていふ時サマシテのアクセントが高くなる。ハナシテ<sup>△</sup>クダサイ、續けていふ時クダサイのアクセントが高くなる。ニサンニチ、又はニサンニチといふ人もある。どちらでも良い。俗語で略してニサンチといふ時は必ずこの型である。ドオシテ<sup>△</sup>モ、別々にはドオシテ<sup>△</sup>モである。別々にいふ時は如何なる方法を以て之を行つても「いふ意味が強く表れる。之は原文に調和し

ない。原文は單に「全く」といふ位の心である。この時は常に續けてドオシテモの型になる。  
タスケテアゲマシ<sup>。</sup>オ、續けていふ時アゲマシ<sup>。</sup>オのアクセントが高くなるらない。

[乙]

(イ) 斷續 ネズミガの次で切る。サマシテの次で切る。クダサイ>トの>この符號は本書五四頁参照。ネズミワソノコエオの間は切つても續けても良い。ワナノの次で切つてもよい。フトイナワオは必ず續けなければいけない。ワナノフトイと續けてその次で切るのは甚だ悪い。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 メオサマシテをその前のシシガよりも強める。ドオシテモを強める。スグを稍強める。タスケテを強める。フトイナワオのナワオの方を強める。もしフトイの方を強めると「細い方の繩は切らなかつた」といふ様に聞えるから良くない。アリガトオを強める。調子、ハナシテクダサイの終は尻下がりの調子になる。

次の桃太郎の話は長いから便宜數段に切つて記す。

ムカシ	ムカシ	オジ	イサント
オバ	アサン	ガ	アリ
マ	エ	シ	バカリ
ニ	イ	キ	マシ
タ	オ	バ	アサン
ガ	カ	ワ	エ
セン	タク	ニ	
イ	キ	マ	シ
タ	オ	バ	アサン
ガ	カ	ワ	デ
セン	タク	オ	シ
テ	イル	ト	カ
カ	ワ	カ	ミ
カラ			
オ	オ	キ	ナ
モ	モ	ガ	ド
ン	ブ	リ	コ
ナ	ガ	レ	テ
キ	マ	シ	タ
ヒ	ロ	ッ	テ
ウ	チ	エ	
カ	エ	リ	マ
シ	タ		

オジイサング ヤマカラ カエッテ キタトキ  
 オバアサング ソノ モモオ ミセマシタ  
 オジイサンワ  
 コレワ コレワ メズラシイ オオキナ  
 モモダト  
 イッテ ヨロコビマシタ

[甲]

(イ) 發音 センダクとダを濁音にいふこと東京語には全く無い。故にセンタクの方を標準語としてこの讀本に採用してあるのである。  
 (ロ) アクセント シバカリ、之をシバカリといつてはいけない。モモ。參者モモ(股)。ドンブリコ、昔から傳はつた話し方では必ず此型でいふ。又はドンブラッコ、スッコッコといふ方が吾々の幼時から一層親しい言ひ方であつた。ドンブリコの様には云はない。ナガレテ

[乙]

(イ) 斷續 ムカシムカシは續けていふのが昔からの傳統である。オバアサングで切り、カワデセンタク……を續ける。キタトキの次で切る。「ウチエカエリマシタ」の次は話が少し變るから稍長い休止を置く。コレワコレワ、驚嘆を表す感動詞として常に續けていふ。速度 この話全體として速度には工夫を要する。唯この一段には大して變化を附ける必要がない。強ひていへば、お爺さんの言葉をやゝゆつくり云ふ位なものであらう。  
 (ハ) 抑揚調子 についても工夫を要する。コレワコレワは感動した心を聲に表すため強いひ、且調子を高める。メズラシイとオオキナと同様に強める。

オバアサング モモオ キロオト シマシタ

五十八頁

スルト モモガ フタツニ ワレテ ナカカラ  
 オオキナ オトコノコガ ンマレマシタ  
 オジイサンワ モモノ ナカカラ ンマレタト  
 ユウノデ モモタロオト ナオ ツケマシタ  
 モモタロオワ ダンダン オオキク ナッテ  
 タイソオ ツヨク ナリマシタ

[甲]

(イ) 發音 ンマレマシタ、ン<sub>レ</sub>はmの音を表す、母音は無い。強ひてウマレ  
 タと發音させる必要は無い。(本書一〇一頁参照)

(ロ) アクセント オトコノコガ、別々にはオトコノ(平)コガ(平)であるが、此處  
 は必ず續けてこの型にいふ。モモタロオ、之は決してモモタロオ  
 といはない。ナオ(平)。参考 ナオ(菜を、猶)。ツケマシタ。参考  
 ケル(附)ツケル(平)漬ける。

[乙]

(イ) 斷續 スルトの次で切つて良い。モモガフタツニは續ける。スル  
 トモモガと續けて次を切るのは良くない。オジイサンワの次で  
 必ず切らなければいけない。モモタロオワの次で切つてもよい。

(ロ) 速度 通常。  
 (ハ) 抑揚調子 オオキナとオトコノコと同じ位に強める。モモタロオト  
 を強める。タイソオとツヨクと同じ位に強める。調子は通常。

五十九頁

六十頁

アルヒ モモタロオワ オジイサント  
 オバアサンニ  
 ワタクシワ オニガシマエ オニタイジニ  
 イキマスカラ キビダンゴオ コシラエテ  
 クダサイ>ト  
 モオシマシタ

フタリワ オダンゴオ コシラエテ  
 ヤリマシタ  
 モモタロオワ イサマシク デカケマシタ

[甲] (イ) 發音 コシラエテ、このラエの音に注意、或方言でライとなる傾があるならば、さうならぬ様練習を要する。

(ロ) アクセント オニガシマ又はオニガシマ。どちらでも良い。コシラエテクダサイ、續けていふ時この型になる。コシラエテヤリマシタも同様である。

[乙] (イ) 斷續 アルヒの次は切つても續けてもよい。ワタクシワの次は切つてもよい。もし續けるならば、イキマスカラまで續けないと變になる。フタリワの次は切つてもよい。もし續けるならば、ヤリマシタまで續けないと變になる。

(ロ) 速度 通常。

ス コ シ イ ク ト ム コ オ カ ラ イ ヌ ガ  
 キ マ シ タ

(ハ) 抑揚調子 オニガシマエとオニタイジニとキビダンゴとを強める。

コシラエテヤリマシタのヤリマシタを餘り強くしない様注意。

モモタロオサン モモタロオサン ドコエ  
 オイデニ ナリマスカ  
 オニガシマエ オニタイジニ  
 オコシニ ツケタ モノワ ナンデスカ  
 ニッホンイチノ キビダンゴ  
 ヒトツクダサイ オトモシマシヨオ  
 モモタロオワ イヌニ オダンゴオ

六十三頁

ヤリマシタ<sup>△</sup> イヌワ ケライニ ナッテ  
ツイテ イキマシタ<sup>△</sup>

ソレカラ スコシ<sup>△</sup> イクト ムコオカラ

六十四頁

サルガ キマシタ<sup>△</sup> (中略)

六十四頁

サルモ オダンゴオ モラッテ ケライニ

六十五頁

ナリマシタ<sup>△</sup> ツレテ マタ スコシ

六十五頁

イヌト サルオ ツレテ マタ スコシ

六十六頁

イクト コンドワ キジガ キマシタ<sup>△</sup> (中略)

六十六頁

キジモ オダンゴオ モラッテ ケライニ

六十七頁

ナリマシタ<sup>△</sup>

六十七頁

モモタロオワ イヌ サル キジオ ツレテ

オニガシマニ ツキマシタ<sup>△</sup>

[甲] (イ) 發音 ヒトツクダサイと續ける時ツの母音が無聲化し易い(次にク  
のk音が來るためである)。之は無聲化させない様にする方がよ  
い。

(ロ) アクセント オイデニナリマスカ續けていふ時この型になる。ツケ  
タモノワ續けていふ時モノワのアクセントが高くなる。オ  
トモシマシヨオ續けていふ時シマシヨオのアクセントが高くな  
らない。ツイテ。参考 ツイテ(平)は「突いて」の意。ツキマシタと  
なると「着も突も同じ型になる。キジ(平)。参考 キジは「生地」の意

[乙] (イ) 斷續 二回繰返すモモタロオサンは續けてよい。昔からの傳統的  
の話方では續けていふ。モモタロオワイヌニと續けてその次で  
切るのは良くない。切るならばモモタロオワの次で切る。ソレ  
カラスコシイクトの前で少し休止を置く方がよい。三匹の動物  
の來る話の前で一々休止を置く方がよい。スコシイクトの次で

切る。

(ロ) 速度 桃太郎の言葉は「威嚴」を示すため多少ゆつくり云ふ方がよいであらう。

(ハ) 抑揚調子 イヌガサルガ、キジガを強める。一々新しく動物の來たことをいふ處だからである。ドコエを強める。オイデニナリマスカ、ナンデスカの終の調子は尻下がりにする方がよいであらう、尻上がりにする時は語氣が柔かに過ぎる様に思はれる。「注意」三回同じ言葉の繰返される桃太郎と動物との問答は同じ速度抑揚調子で云つて差支ない。舞臺の上などで劇的に演ずる時、又はわざと劇的に朗讀する時は三匹の動物の聲色を一々變へるのも面白いであらうが、唯の朗讀には必ずしもそれ程變化を附けるには及ぶまい。

オニワ テツノ モンオ シメテ シロオ  
マモッテ イマシタ

キジガ トンデ イッテ ウエカラ テキノ  
ヨオスオ ミマシタ  
サルワ スルスルト モンオ ノボッテ  
ナカエ ハイリマシタ ソオシテ モンノ  
トオ アケマシタ  
モモタロオワ イヌト イッショニ  
セメイリマシタ  
キジワ スバヤク トビマワッテ オニノ  
メオ ツツキマシタ サルト イヌワ  
△ヒツカイタリ カミツイタリシテ オニオ  
クルシメマシタ

[甲]

(イ) 發音 トビマワツテ、このワの音を明かに發音する様注意(讀本三十頁マワツテ参照)。マアツテの様になり易い。ツツキマシタ、始めのツの母音だけが無聲化する。次のツもキの前(ㄱ音の前)であるから、母音無聲化の條件が具はつて居る。そのため之も無聲化し易い傾があるが、さうしない方がよい。

(ロ) アクセント シロオ(平)。参考 シロオは「白を」の意。トンデイッテ、又は續けてトンデイッテともいふ。どちらでも良い。但し俗語でトンデッテといふこともあるが、避ける方がよい。ヒツカイタリ、カミツイタリ。参考 ヒツカク、カミツク(平)。

[乙]

(イ) 斷續 シメテの次で切つても良い。トンデイッテの次で切つても良い。トンデイッテウエカラと續けてその次を切るのは良くない。ノボツテの次は切る方がよい。全體が稍長い文だからである。

(ロ) 速度 モモタロオワイヌトイッシヨニ云々の一節は激戦を示す心で多少速く云つても良い。

(ハ) 抑揚調子 意味の上から大切な語句を強めること他と同じ。調子は通常。

七十頁

モモタロオワ カタナオ ヌイテ オニノ

七十二頁

タイシヨオニ ムカイマシタ

七十二頁

オニワ ミンナ モモタロオニ

コオサンシマシタ  
 モオ ケツシテ ヒトオ クルシメタリ  
 モノオ トツタリ イタシマセン イノチ  
 ダケワ オタスケクダサイト



七十三頁

モオシマシタ

モモタロオワ

オニオ

ユルシテ

ヤリマシタ

オニワ

オレエニ

イロイロノ

タカラモノオ

サシダシマシタ

モモタロオワ

タカラモノオ

七十四頁

モツテ

オニガシマオ

ヒキアゲマシタ

タカラモノオ

ツンダ

クルマオ

イヌガ

ヒキマス

サルガ

アトオシオ

シマス

キジガツナオ

ヒキマス

エンヤラヤ

七十五頁

エンヤラヤ

カケゴエ

イサマシク

カエツテ

キマシタ

オジイサント オバアサンワ タイソオ  
ヨロコンデ モモタロオオ ムカエマシタ

[甲]

(イ) 發音 オレエニ、本書一頁参照。  
ロ) アクセント オニノ<sup>ノ</sup>が附くので平板式になる。

ニ等。

参考 オニワ、オニ

モオ、日常語では常に平板式にいふ。モオの様な型は使はない。  
ヒトオ、又はヒトオといふ事もある。イノチダケワ、續けていふ時  
ダケワのアクセントが高くなる。此處はダケワを強める處  
であるからケを高くいふ。オタスケ、クダサイ別々にはこの型で  
いふが、此處は續ける。ユルシテヤリマシタ、續けていふ時ヤリマ  
シタのアクセントが高くなる。タカラモノオ又はタカラモ  
ノオといふ人もある、どちらでも良い。  
カエツテキマシタ、續けていふ時キマシタのアクセントが高くな

[乙]

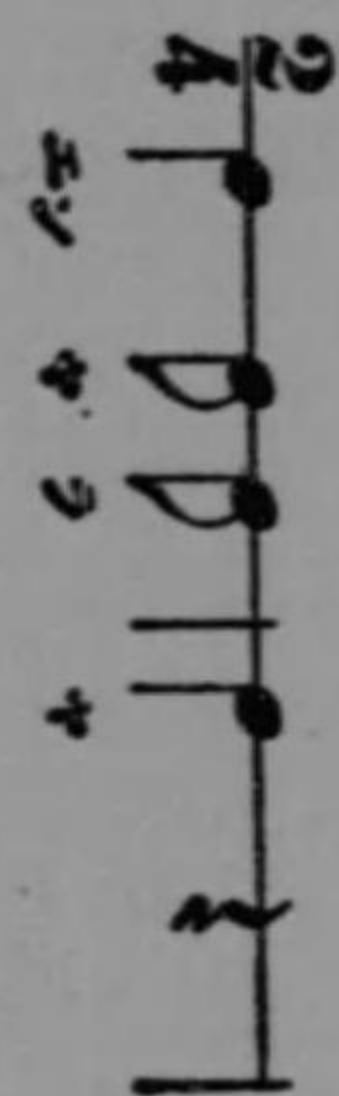
らない。

(イ) 断續 ヌイテの次で切る。タタカイマシタガの次で切る。オニワの次ミンナの次で切つても良い。オニワの次で切つてミンナの次は續けても良い。オニワミンナと續けてその次で切つても良い。オニワの次で切る。オレエニの次は續ける。ヒキアゲマシタの次は休止を置く。クルマオまでは文の始から續けていふ。クルマオの次で切る。ヨロコンデの次で切る。

(ロ) 速度 通常。

(ハ) 抑揚調子 マケマシタを強める。ケツシテを強める。ダケワを強める。ユルシテを強める。始めのタカラモノオを強める。ヒキア

ゲマシタを稍強める。エンヤラヤ、特に



の様なリズムを附けるならば、*マ*を強くいふことになるが、必ずし

五十音圖について

もさうしなくて良い。

五十音圖は七十八頁の漢字表と共に「文字」を排列したものとして教へることが一つの目的である。もし發音の分類表として音讀させるならば、

サ	シ	ス	セ	ソ	sa	shi	su	se	so
タ	チ	ツ	テ	ト	ta	chi	tsu	te	to
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ	ya	i	yu	e	yo
ワ	キ	ウ	エ	ヲ	wa	i	n	e	o
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	za	ji	(d)zu	ze	zo
ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	da	ji	(d)zu	de	do
シャ	シ	シュ	シエ	シヨ	sha	shi	shu	she	sho
チャ	チ	チュ	チエ	チヨ	cha	chi	chū	che	cho

の如く通常の讀み方をさせる外、

ジャジ ジュジェ ジョ  
 チャチ チュチェ チョ } ja ji ju je jo

といふ、同じ子音を含んだ行を別に造つて練習させるべきである。

ツァ ツィ ツ ヅ ヴォ tsa tsi tsu tse tso  
 の一行は任意にしてよい。

又假名文字に表れてゐないが、ガガの區別を有する地方では

ガ ギ グ ゲ ゴ nga nji ngu nge ngo

ギ ャ ギュ ギョ ngya ngyu ngyo

をも必ず練習させるべきである。

又

ヤ (イ) ユ イェ ヨ

ファ フィ フ フェ フォ

ワ ウィ (ウ) ウェ ウォ

をも練習することも一つの大切な箇條であるが、卷一には是等の音が出ないから今は省略してよい。西洋諸國語から入つた外來語には是等の音が

使はれ、當然我が國語の標準音と認めるべきものである。

ン、之は單に文字を讀む時便宜「n」か「ng」かのいづれか一つを充てゝおいてよい。「ウン」をいはない方がよい。

小學國語讀本朗讀法(前期用) 終

昭和八年四月一日 印刷  
昭和八年四月五日 發行



小學國語讀本朗讀法(卷一) 【定價八十錢】

著者 神保格

發行所 岡本正一  
東京市麹町區下六番町四十八番地

印刷者 山本禎男  
東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地

印刷所 宗文社印刷所  
東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地

發兌

厚生閣書店

東京市麹町區下六番町四十八番地  
電話東京五九六〇〇番  
電話九段三二一八番

# 國語關係優良圖書選

〔厚生閣版〕

丸山林平先生著

國語教育學

菊判背革製 定價四圓二十錢  
函入五七〇頁 送料二十二錢

佐藤徳市先生著

形象の読み方教育

菊判洋布裝 定價二圓九十錢  
函入三四〇頁 送料十八錢

宮川菊芳先生著

國語科要旨の批判と解説

四六判布裝 定價一圓八十錢  
函入三三〇頁 送料十四錢

武藤要先生著

國語教育診斷

四六判洋布裝 定價一圓八十錢  
函入六八〇頁 送料十八錢

★國語教育の研究は單なる教授法の研究に終始すべきでなく、その本來の目的は「國語教育の事實を對象とする科學」の研究でなければならぬ。嘗々研鑽多年、茲に初めて巨大なる國語教育學を樹立す

★本書は心と詞との渾然合一を高唱し、生命の読み方は當然形象の読み方教育に進展すべきである事を明らかにしめられたもの。氏最近の獨創的大業の全貌を覗ぶに足るもので斷然斯界をリードしてゐる

★國語科の教則・要旨・目的を批判し解説する事によつて著者独自の國語教育論・讀方教育論を述べたるもの。著者最近の深き思索による力著であつて、國語教育の原理的實際的指導書中の最高權威書！

★一見奇矯に見える本書の題名には著者の新しい思索を感らるが爲の苦心と發見とが用意されてゐるのだ。著者の試みたところは「讀みの本質を確立する」ことを主眼とする讀み方教育の樹立にある。

森本市先生著

辨證法的讀方教育

四六判洋布裝 定價一圓八十錢  
函入三三〇頁 送料十四錢

神保格先生著

辭典

三六判總革裝 定價一圓五十錢  
函入五五〇頁 送料十四錢

神保格先生著

發音とアクセント

一五〇頁 第一用 定價一圓五十錢  
一八〇頁 第二用 定價一圓八十錢  
二〇〇頁 第三用 定價一圓九十錢  
二二〇頁 第四用 定價一圓  
二五〇頁 第五用 定價二圓十錢  
三〇〇頁 第六用 定價二圓二十錢  
送料各十四錢

★形象の讀み方教育から辨證法的讀み方教育へ！ 今や國語教育界は辨證法に新しい關心と激しい熱意を持たんとしてゐる。斯界に先驅し明日を約束するものは唯本書あるのみ！ 斷然讀方教育の新潮流

★國語發音の擁護確立！ 解説附決定版標準發音にする日用語三萬の全的把握！ 文部省の委嘱を受け、此ことの爲に全面的的研究を續けて來た著者の大業。茲に完成さる。本邦最初の國語標準發音辭典

★正しき日本語の確立、健全なる現代語の指示、正確なアクセントの指導、讀み振朗讀法の手引等のために初めて現れたる大著である。標準語の學的決定と國語教育の新研究とは不可缺の書だ！ 學年別六冊何れも既に好評噴々たる名著

千葉春雄先生著

生活に即く讀み方

四六判布裝 定價二圓六十錢  
函入三七〇頁 送料十四錢

★讀み方教育は行詰つたといはれてゐる殊に低學年の讀み方は、聲だけで實が擧げられないとも云はれてゐる。しかし本書は雄壯にさうした憂ひを否定してゐる。實際指導の詳述にすべてを盡してゐる。

千葉春雄先生著  
最近の文學・文章研究と國語教育

菊判美裝 上製定價二圓五十錢 送料十八錢  
函入四七〇頁 並製定價二圓三十錢 函ナシ

東京高師 宮川菊芳先生著  
現代讀方教育の實相と批判

菊判布裝 定價三圓六十錢 送料十八錢  
函入四一二頁

東京高師 宮川菊芳先生著  
讀方教育の鑑賞

四六判布裝 定價二圓 送料十四錢  
函入二四〇頁

東京高師 宮川菊芳先生著  
態度馴致の讀方教育

四六判布裝 定價二圓六十錢 送料十四錢  
函入四三〇頁

東京高師 佐藤徳市先生著  
國語の本質とその教育

四六判布裝 定價二圓六十錢 送料十四錢  
函入四一〇頁

★文學文章の大講座！國語教育今日の食餌、明日の指標！「現代の文學とその方向」、「明日の文學」、「現代の文學とその方向」、「明日の文學」その他の系統的組織的大研究、文壇權威新進總動員！

★現代讀方教育の實相と大勢とを展開して、その取扱へる分野の廣さと、研究の深淵なものはその比類を見ない。精緻な經驗と論理との筋を通して著者一流の讀方の本質觀を確立したものが本書である。

★著者の持説たる讀方鑑賞教育の立脚點を闡明したもので、特に本書は藝術の本質を遺憾なく研究したものである。韻文教材の價值批判より始まつて、文藝の創作とその鑑賞のすべてを詳説してゐる。

★正しく文を讀み、正しく考へる態度、正しく鑑賞する態度、それらを如何にして指導するかを具體的に説いてゐる。宮川氏は常に對象の眞の姿を見極める爲に苦心を抱く、その面目躍如としてゐる。

★鑑賞論が提唱されて以來、この方面の研究は他方に文學それ自身によつて文學をみる批評精神への展開を要望した。佐藤氏の本書は文學論としての國語の本質を論じ盡し文學批評の新精神へ飛躍した。

